うつのみや 歷史民俗 第16回

殿様芸を極めた戸田忠翰

栃木県立博物館 学芸企画推進員 久野 華歩



桃果綬帯鳥図 戸田忠翰筆 江戸時代後期 (栃木県立博物館蔵)

迫していた時代でもあった。 びの宇都宮への国替えが藩財政を圧 比べ、為政者としての業績には乏し あったらしく、また、父の代での再 を送ったという。 忠翰は生来病弱で 忠翰は、政治に精力的であった父に 年まで藩主を務めた人物である。 歳で家督を継ぎ、文化八(1811) 戸深川清住町の屋敷で静かに余生 五十一歳で隠居したのちは、江 寛政十(1798)年に三十八

の円熟期に描かれた優品である。ゴ 桃果綬帯鳥図」は、忠翰の画業 ここに紹介するおめでたい画題の

> を放つ線描によるこの画風は、南蘋色彩、そしてどこか謎めいた雰囲気 が目をひく。緻密な描写と濃密な ツゴツとした独特の木肌の桃の木は を放つ線描によるこの画風は、 非常に繊細である。この濃密さに比 な絵の具を細密に重ねて描写され、 かんでいる。 綬帯鳥の羽毛は、上質 ら、赤い斑点がえくぼのようにはに 実が四個、未成熟な青みを残しなが 葉の陰には、凸凹とした大振りの果 鳥がとまっている。 画面に折り返し、そこに二羽の綬帯 派といわれる流派の描き方による。 が、うねりのある特徴的な筆の動き 大胆にフレームアウトして枝だけが 樹木は一見あっさりとしている 踊るような桃の

戸田忠寛の嫡子として江戸に生ま

遺した。戸田忠翰は、宇都宮藩主

た技術で華麗な花鳥画作品を多く 人の域を超え、玄人顔負けの卓越し (1761~1823) は、

に親しみ、狩野派風の作品を遺して た絵画作品を多く描いたことが知ら 佐野藩主の堀田正衡は狩野派に倣る るためのたしなみであった。例えば、 ところで、江戸時代の武家にとっ 忠翰の父忠寛や息子忠温も絵 学問と同じく文化的教養を得 絵を学ぶことは稀なことではな

> 熱心に修得したことにある。 派の画風を師から正統に学び受け すべき点は、当時流行していた南藾 いる。忠翰の絵画制作において注目

期待されないようである。

しかし、

宇都宮藩のお殿様である戸田忠翰

趣味

メージが先立ち、技術の上手さは をもてあました人の道楽というイ

殿様芸というと、いかにも金と暇

に広まった絵画の流派をいう。 である森蘭斎という画家であった。 翰が学んだのも、熊斐の弟子の一人 らには諸大名の間で大流行した。 たちによって、南蘋派は長崎から上 のみであった。その後、熊斐の弟子 国語通訳の熊斐(1712~72) に渡来して二年足らず滞在し、その は、享保十六(1731)年に長崎 南蘋(名は銓)の影響を受けて日本 南蘋派とは、 江戸、そして全国に画風が広ま 十八世紀以降、画家や文人、 南蘋から指導を受けたのは、 中国・清の画家、 南蘋

に認められるほどの存在であったので 蘋派の正統を受け継ぐ者として、 る。忠翰は、 わった南蘋の絵が忠翰に贈られてい 南蘋から熊斐、 没する享和元 懇切に教えを授けたといい、 業画家にはなれない忠翰に対しても ら絵の手ほどきを受けるようになっ に大坂から江戸に出て以降、蘭斎か が寛政年間 に独学で南蘋風の絵を描き、 はじめは画譜などの絵手本をたより たとされる。 蘭斎は、藩主として職 南蘋から脈々と続く南 1789 1801 熊斐から蘭斎へと伝 1 8 0 1 年には、 蘭斎が 蘭斎



幼いころから絵を好んだ忠翰は